

ランキングからわが国の都市の「成長可能性」を考える

株式会社野村総合研究所 社会システムコンサルティング部
上級研究員 小林 庸至

1. 地方創生において目指すべき都市像

現在、わが国では、東京への一極集中に歯止めがかからない状況である。2040年までを見通したとき、人口増加が見込まれる都市圏¹は、刈谷（愛知県）、安城（愛知県）、守山（滋賀県）、那覇（沖縄県）、沖縄（沖縄県）、石垣（沖縄県）のわずか6都市圏であり、ほとんどの地方都市で人口のさらなる減少が見込まれている。

また、都市の経済力を示す人口1人あたり付加価値額は東京の独り勝ちの状態であり、東京以外の都市圏で高いのは、厚木、富士吉田、御殿場・裾野、刈谷など、大企業の工場が立地している企業城下町に限られる。

一方、海外に目を転じてみると、日本と同様に人口減少と高齢化に直面しているドイツには、人口は10万人級だが、生産性で大都市をしのぐ地方都市がいくつも存在している。

ドイツで生産性の高い都市には四つのタイプがある。日本の東京や大阪のような「経済拠点型」の都市、一つの大企業およびその取引先が経済を支える「企業城下町型」の都市、世界的な観光資源がありインバウンド観光客を集める「交流型」の都市、そして——これが日本には見られないのだが——地域に進出したグローバル企業や大学・研究機関からいくつもの新たな企業が生まれ、世界から外貨を稼いでいる「内発発展型」の都市である。

内発発展型の都市の代表例が、人口12.7万人（都市圏人口60万人）のレーゲンスブルク市（バイエルン州）である。同市には、自動車産業を中心に、半導体・電機・産業機械・高度IT・制御・センサー等の企業が集積し、1人あたり域内総生産（GRP²）は国内第6位、生産額に占める輸出額の比率は60%以上に達する。

同市の発展のきっかけは、1986年にBMWの生産・開発拠点が立地したことである。やがて、同社に部品を供給するサプライヤーも研究開発拠点を置くようになり、そこからスピアウトした人材が同地で創業する流れが生まれている。同市で誕生した企業が、域外に流出することなく、同地でビジネスを成長させ、世界から外貨を獲得している。

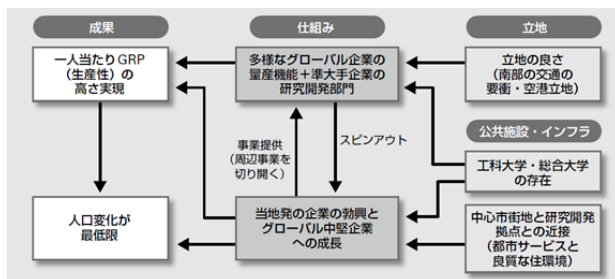
内発発展型の都市には、レーゲンスブルクのほかに、エアランゲン（バイエルン州）、ハイルブロン（バーデン・ヴュルテンベルク州）等がある。内発発展型の都市は、企業城下町型の都市とは異なり、一つの企業、一つの産業に依存していない。さまざまな大手企業が、こうした内発発展型の地方都市に、積極的にビジネスの拠点を置いている。例えば、シーメンスは、グローバル本社はミュンヘンに置いているが、機械製造の研究開発拠点はレーゲンスブルク、医療・都市・エネルギー事業部門の本社はエアランゲンに置いている。シーメンスがこれらの都市にビジネスの拠点を置いているのは、良質な人材や先端的な研究開発成果等の資源を活用できるためである。

¹ 「日本の都市圏設定基準」（金本良嗣・徳岡一幸、2002）に基づく「都市雇用圏」単位で見ている。都市雇用圏は、DID人口および従業員常住人口比から中心都市を選定し、そこへの通勤率を考慮して圏域を定義したもの。

² 域内総生産（Gross Regional Product : GRP）とは、一定の地域内で生産された付加価値額。

厳しい言い方になるが、日本の地方都市はこれまで、限られた大都市に人材を供給し、大都市の稼ぎの一部で財政を支えてもらう「大都市依存」の構造にあった。しかし、日本全体として人口減少、市場の縮小が見込まれる中、今後は、地域で人材・企業を育成し、自立して世界から外貨を獲得し、地域経済をリードする「ローカルハブ」になっていくことを目指す必要がある。

図表 1 レーゲンスブルク市の経済発展要因



出所) 神尾文彦「大都市と地方の自立共生モデル ローカルハブの形成が重要に」『知的資産創造』(2015.6)

2. ローカルハブの要件

それでは、地方都市がローカルハブになるためには、どのような要件が必要なのだろうか。

1) ビジネスを生み出す基盤となる企業・研究機関の存在、およびそれを支える自治体の取り組み

スタートアップや、地元企業による新事業の創出が活発になされ、ローカルハブとして成功している都市に共通する要件としては、「多様な産業が根付く基盤としての大手企業の存在」「優秀な人材を輩出する大学・研究機関の存在」「地方公共団体による創業・イノベーションを促す取り組み」が挙げられる。

例えば、米国のオースティンは、もともとは官公庁・大学の街にすぎなかったが、テキサス大学により産学官インキュベーター組織

が設置され、ナショナルプロジェクトの誘致によりコンピューター・半導体のハイテクエンジニアが集まるようになったのを機に、スタートアップの街へと変貌した。立地する大手企業(IBM、デル、テキサス・インスツルメンツ)からのスピニアウトも活発になされ、現在では米国で最も経済成長著しいハイテク産業の都市となっている。同地で開催される「サウスバイサウスウエスト(SXSW)」³は、世界中から20万人が訪れる全米最大のビジネスイベントに成長し、交流人口の飛躍的な増大をもたらしている。

また、スタートアップの本場であるシリコンバレーは、1939年のヒューレット・パカード創業以降、“PC・半導体産業⇒インターネット関連産業⇒モバイルビジネス⇒ソーシャルメディア”と産業構造の転換を見事に果たしつつ、常にIT産業の中心となっているが、この基盤としては、世界中から優秀で起業意識の高い人材を集める大学(スタンフォード大学、カリフォルニア州立大学等)の存在、スピニアウトの母体であるとともに積極的にベンチャー投資も行う大企業の存在が大きいといえる。

2) 高度人材を引きつける都市の魅力、寛容な風土

新たなビジネスを生み出す上で最も重要な要素は「人材」であり、優秀な人材を集めることができる都市が、次世代産業育成の競争に勝ち残ることができる。

世界中から高度人材を集めるためには、こうした人材が住み働きたいと思えるような魅力的な都市づくりが必要であり、その際の重要な視点が、都市の「寛容性」である。

³ オースティンで開催されるミュージック、フィルム、インタラクティブ部門のフェスティバル・カンファレンス。10日間にわたって多くのイベントが、メイン会場となるコンベンションセンターだけでなく、街中のバーやカフェ、クラブや路上、至るところで同時多発的に開催される。

都市社会学者リチャード・フロリダは、新しいアイデア、技術、コンテンツを創造することができる人材を「クリエイティブクラス（創造階級）」⁴と呼び、こうした人材は「寛容性」のある都市に引きつけられ、こうした人材の誘致に成功した都市が新たな産業を生み、経済的にも発展すると結論づけている。

フロリダは、都市の寛容性を測る指標として、「ゲイ指数（人口に占めるゲイ人口の割合）」「ボヘミアン指数（人口に占める作家、デザイナー、ミュージシャン、俳優、アーティスト等の割合）」「メルティングポット指数（人口に占める外国生まれ人口の割合）」に注目し、これらの値が高い都市ほど、クリエイティブクラスの集積度、ハイテク産業の集積度、イノベーションが生まれる確率が高いこと、すなわち、マイノリティーに対する寛容性と経済成長との間に強い相関があることを実証した。

実際、グーグル共同創業者のセルゲイ・ブリンはロシア出身、ヤフー共同創業者のジェリー・ヤンは台湾出身、サン・マイクロシステムズ共同創業者のビノッド・コースラはインド出身である。また、創業者に限らず米国を代表する企業の CEO を見ても、マイクロソフトのサティア・ナデラ、グーグルのサンダー・ピチャイ、マッキンゼー・アンド・カンパニーのラジャット・グプタはインド、コカ・コーラのネビル・イズデルはアイルランド、ファルマシアのフレッド・ハッサンはパキスタン、ケロッグのカルロス・グティエレスはキューバと外国出身者は枚挙にいとまがない。さらに、アップルの現 CEO ティム・クック、フェイスブックの共同創業者クリス・ヒューズはゲイであることを公表してい

る。異質な才能、異質なアイデアが混ざり合うことで、新しいアイデアが生まれる可能性が高まる。国籍、人種、宗教、年齢・世代、性別（ジェンダー）・セクシュアリティ、障害の有無など、マイノリティーと呼ばれる人を排除せず、多様な文化や価値観を受け入れる寛容性に富んだ都市は、こうしたクリエイティブな人材を引きつけ、新たなビジネスを創出する可能性が高いと考えられる。

こうした「寛容な風土」「都市の魅力」で優秀な人材を引きつけている都市が、米国のシアトルやポートランドである。

シアトルは、もともとはボーイングの企業城下町だったが、1980年代にはマイクロソフトが移転し、1990年代にはアマゾン・ドット・コムが創業したり、マイクロソフトから多数のスピンアウト企業が生まれたりするなど、現在ではソフトウェア産業の一大集積地に変貌し、さらに、ソフトウェア産業と関連の深いゲーム産業や製薬・生命科学産業など、産業の幅が広がり、持続的な成長を実現している。

重要なのは、こうした企業がシアトルに残ってビジネスを発展させている点である。シアトル市は、ダウンタウンを活性化したり、文化・芸術の発展など、生活の質を高めるまちづくりに力を入れたりしている。その結果、「仕事のある場所に住む」のではなく、「住みたい場所で仕事を見つける」志向が強い、若いクリエイティブ層が集まるようになり、優秀なエンジニアを確保できるとして、シリコンバレーに本社を置くアドビシステムズ、グーグル、オラクルが研究開発拠点等を設置するようになった。また、シアトルは、スターバックスコーヒーやタリーズコーヒー発祥の地でもある。こうした企業は、コーヒーとともにあるシアトル型のライフスタイルを輸出して外貨を獲得しているのである。

同じく米国西海岸に位置するポートランド

⁴ フロリダによると、クリエイティブクラスには、科学者、エンジニア、建築家、デザイナー、アーティスト等の「スーパークリエイティブコア」と、ビジネス・IT・金融・医療・法律等の専門家である「クリエイティブプロフェッショナル」が当てはまるという。

も、さまざまな都市ランキングで、「全米で最も住みたい街」「最も環境にやさしい街」として評価されていることで有名である。同市は、米国の都市としては珍しく、古くから都市計画のコントロールに力を入れ、公共交通主体のコンパクトなまちづくり、環境にやさしいまちづくりを進めてきた結果、自然環境やライフスタイルを重視するミレニアル世代を引きつけ、若い世代を中心に多くの移住者を生んでいる。さらに、若い優秀な人材を獲得しやすいこと、また、法人税が安いことから、ナイキの本社、インテルの全米最大の製造拠点のほか、多数のソフトウェア系企業（グーグル、マイクロソフト、セールスフォース・ドットコムなど）がオフィスを設置するに至っている。

このように、人に選ばれる街が企業も引きつけるのである。

3. 都市の成長可能性を評価する方法論

それでは、日本でローカルハブになりうるポテンシャルを秘めた都市はどこなのだろうか。

NRIは今回、ローカルハブになりうるポテンシャルの高い都市を見極めるため、都市圏の人口規模等を考慮して選定した国内100都市を対象に、産業創発力の現状および将来のポテンシャルを評価した「成長可能性都市ランキング」を作成した。

図表 2 分析対象とした100都市⁵

北海道	札幌市	栃木県	栃木市	静岡県	浜松市	岡山県	岡山市	
	函館市		小山市		沼津市		広島県	広島市
	旭川市	群馬県	前橋市	愛知県	名古屋市	山口県	下関市	
	釧路市		高崎市		豊橋市		宇部市	
	帯広市		伊勢崎市		岡崎市		福山市	
	北見市	埼玉県	太田市	千葉県	半田市	徳島県	徳島市	
	苫小牧市		さいたま市		刈谷市		香川県	高松市
千歳市	東京都	千葉市	神奈川県	豊田市	徳島県	徳島市		
青森県		青森市		横浜市		西尾市	香川県	高松市
弘前市	東京都特別区部	東京都	新潟県	津市	三重県	愛媛県	愛媛市	
八戸市	横浜市	小田原市		新潟市		四日市市	高知県	高知市
盛岡市	岩手県	盛岡市	富山県	伊勢市	滋賀県	大津市		福岡県
仙台市		石巻市		長岡市		富山市	伊勢市	
石巻市	宮城県	上越市	高岡市	大津市	京都府	京都市	佐賀県	佐賀市
秋田市		山形市	高岡市	石川県		金沢市		大阪府
山形市	福島県	福島市	福井県	福井市	兵庫県	神戸市	長崎県	長崎市
福島市		会津若松市		山梨県		甲府市		姫路市
郡山市	茨城県	いわき市	長野県	長野市	和歌山県	和歌山市	熊本県	熊本市
水戸市		水戸市		松本市		鳥取県		鳥取市
日立市	栃木県	上田市	岐阜県	岐阜市	島根県		松江市	鹿児島県
古河市		つくば市		大垣市		静岡県	静岡市	
つくば市	宇都宮市	静岡市	静岡市	出雲市	那覇市			

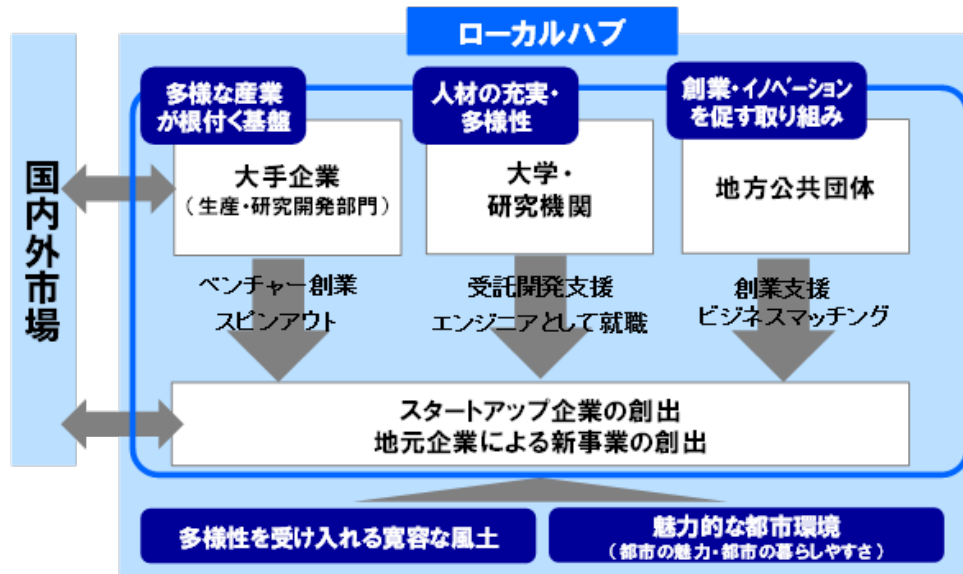
このランキングでは、ローカルハブの要件であると考えられる「①多様性を受け入れる風土」(外部の人材やノウハウを受け入れる風土があるか、多様性に寛容か)、「②創業・イノベーションを促す取り組み」(創業や研究開発活動が活発に行われているか、創業をしやすい環境はあるか)、「③多様な産業が根付く基盤」(地域を支え、ビジネスを生み出す経済基盤・主要企業はあるか、インフラは充実しているか)、「④人材の充実・多様性」(人材・教育が充実しているか、海外人材の集積はあるか)、「⑤都市の暮らしやすさ」(日常生活の利便性は確保されているか、居住環境は快適か、生活コストが低廉か)、「⑥都市の魅力」(さまざまな人が住みたいと思える都市の魅力があるか、街に活気があるか、市民の幸福度は高いか)という六つの視点から、131の指標を設定し、総合的に分析を行っている。

多様性への寛容度や都市の暮らしやすさ・魅力など、統計データでは把握できない情緒的な項目については、各都市の住民を対象とするアンケートを実施して指標化している⁶。

⁵ 都市雇用圏の人口規模およびウェブアンケートの回収可能性を考慮して100都市を選定（なお、東京は1都3県にまたがる都市雇用圏となっているが、各県を代表する都市として横浜市・千葉市・さいたま市を追加した）。

⁶ ウェブアンケートの実施時期は2017年2月、配信対象は各都市に居住する20～59歳の男女、回収数は東京300、横浜市・名古屋市・大阪市200、その他都市100である。

図表 3 NRI が考えるローカルハブの要件



ランキングの作成にあたっては、まず、各指標値を Z スコア（各都市の値と平均値の差を標準偏差で除した値。スコアの大きさは平均値からの乖離＜かいり＞度を示す）に換算して基準化した上で、小項目ごとに集計し、各小項目の指標数で除して「小項目スコア」を算出する。そして、それを全て合計したスコアで「総合ランキング」を作成し、また、全ての小項目を、結果を表す項目（創業の実績、大企業の立地等）と要因を表す項目（多様な人への寛容度、良好な都市環境等）に分け、両者の差分をとったもので「ポテンシャルランキング」を作成している。

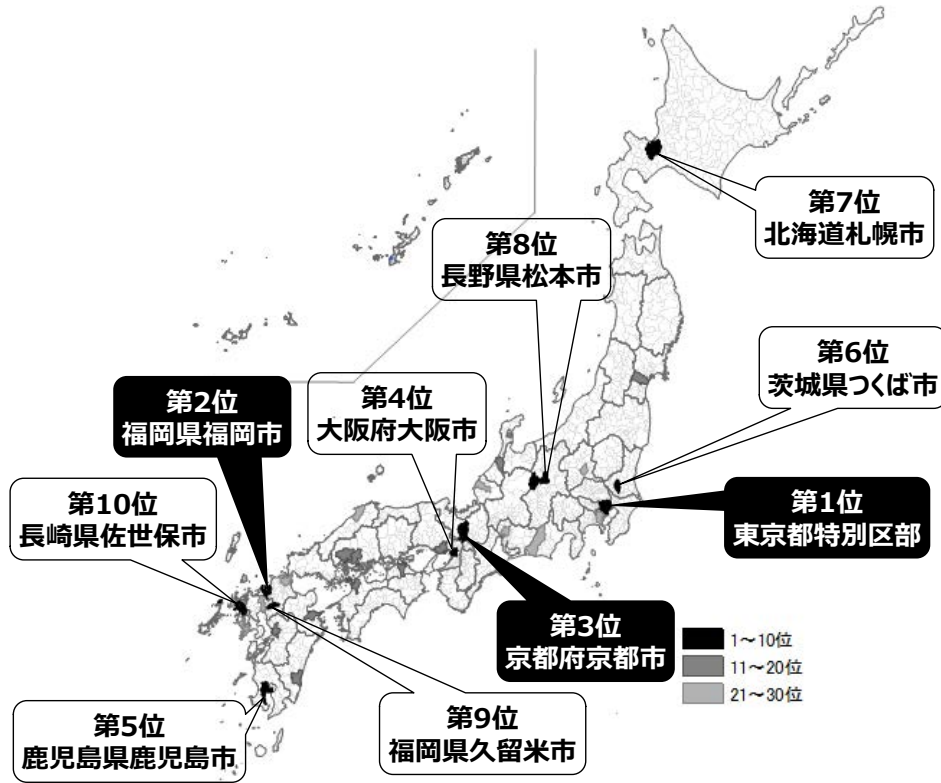
このほか、「移住者にやさしく、適度に自然がある環境で仕事ができる」「リタイア世代が余生を楽しみながら仕事ができる」「子育てしながら働ける環境がある」「起業スピリッツが

あり、スモールビジネスに適している」という四つのライフスタイルを設定し、それぞれに関連する指標を抽出して集計することにより、ライフスタイル別のランキングも作成している。

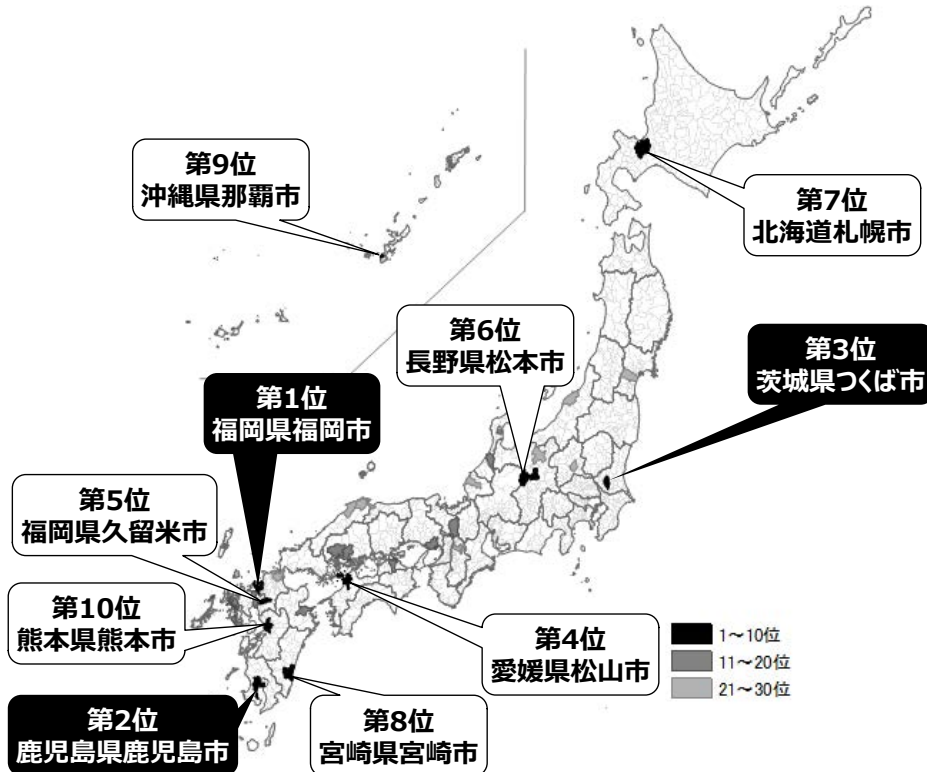
4. 「成長可能性都市ランキング」の分析結果およびそれを踏まえた地方都市の将来像

結果として、実績および将来のポテンシャルを含めた総合的な産業創発力が高いのは、上から順に、東京都特別区部、福岡市、京都市、また、実績とポテンシャルの差分で見た“伸びしろ”が大きいのは、福岡市、鹿児島市、つくば市となった。

図表 4 総合ランキング



図表 5 ポテンシャルランキング



総合ランキングで第2位、ポテンシャルランキングで第1位となった福岡市は、「多様性を受け入れる風土」が100都市中第7位、「創業・イノベーションを促す取り組み」が第3位、「多様な産業が根付く基盤」が第4位、「人材の充実・多様性」が第5位、「都市の暮らしやすさ」が第5位、「都市の魅力」が第1位と、産業創発力を構成する全ての要素をバランスよく満たしており、優秀な人材を引きつけ、新たなビジネスを創出できる可能性が特に高い都市であると考えられる。

実際に福岡市では、そうした取り組みを行っている。同市は、2012年に「スタートアップ都市ふくおか」を宣言し、福岡の強みである“住みやすさ”を生かして経済成長につなげる戦略を打ち出している。2013年には日本最大規模のスタートアップイベント「B Dash Camp」を誘致、2014年には「グローバル創業・雇用創出特区」の指定を受け、「スタートアップカフェ」の開業、専門家（弁護士・税理士等）の無料相談、「ピッチコンテスト」等のイベントの開催、スタートアップが海外でビジネスを行う際の拠点の設置等の取り組みを積極的に行っている。また、民間主導で、「明星和楽」「イノベート・ハブ九州」等のイベントも活発に行われており、2017年までに100社以上が創業、開業率は日本一を達成するなど成果を挙げている。福岡市は、将来の伸びしろが非常に大きい。アジアに近いという立地の強みを生かして国際的な産業形成を促し、東京・大阪・名古屋と並ぶ、わが国を支える世界都市として成長していくことが期

待される。

また、今回算出した12のランキングにおいて、いずれかのランキングで10位以内にランクインした都市は全国で40都市あった。三大都市圏のみならず、地方部にもさまざまな強みを備え、成長のポテンシャルの高い都市が多数あることが分かった。

鹿児島市、久留米市、松本市、佐世保市など、一見、産業創発というイメージが乏しい都市が、都市の魅力や多様性への寛容度等の面で、高いポテンシャルを有していることが分かった。これらの都市では、こうした強みを、企業・人材の誘致、ビジネスの創出につなげていく仕組みの構築が求められる。

また、移住者にやさしく自然がある環境で働くなら鹿児島市、子育てしながら働くなら松本市、起業するならつくば市など、強み・魅力は都市によってさまざまである。各都市が、国内の限られた市場を奪い合うのではなく、自らの強みを生かし、他都市と差別化しながら、地域経済の核である「ローカルハブ」となって世界と結びついていくことで、日本全体として成長していくことが期待される。

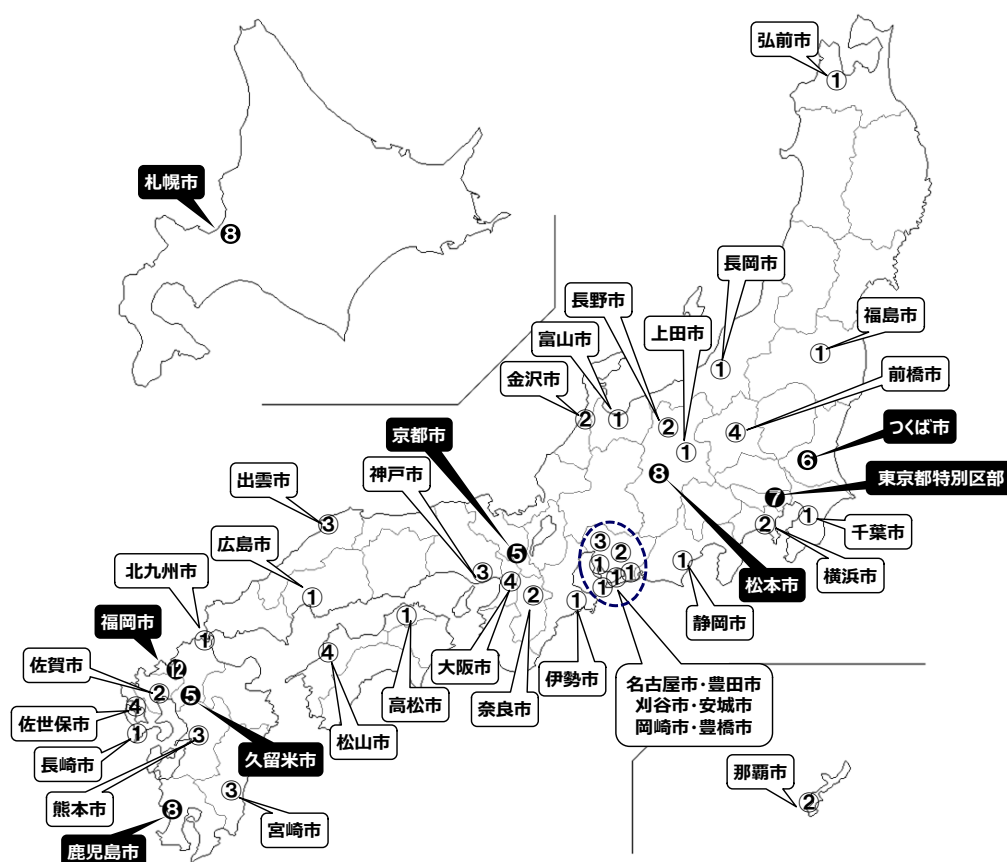
筆者

小林 庸至（こばやし ようじ）
株式会社 野村総合研究所
社会システムコンサルティング部
上級研究員
専門は、都市・地域政策、社会資本政策、
環境・エネルギー政策 など
E-mail: y3-kobayashi@nri.co.jp

図表 6 今回作成した 12 のランキングの結果

		第1位	第2位	第3位
総合ランキング (実績及び将来のポテンシャルを含めた総合的な産業創発力)		東京	福岡市	京都市
ポテンシャルランキング (実績とポテンシャルの差分で見た“伸びしろ”)		福岡市	鹿児島市	つくば市
産業創発力の 6つの視点別 ランキング	多様性を受け入れる風土	東京	札幌市	佐世保市
	創業・イノベーションを促す取組	東京	大阪市	福岡市
	多様な産業が根付く基盤	東京	大阪市	豊田市
	人材の充実・多様性	東京	京都市	千葉市
	都市の暮らしやすさ	佐賀市	奈良市	富山市
	都市の魅力	福岡市	鹿児島市	京都市
ライフスタイル 別ランキング	移住者にやさしく、適度に自然がある 環境で仕事ができる	鹿児島市	松本市	宮崎市
	リタイア世代が余生を楽しみながら 仕事ができる	鹿児島市	福岡市	松山市
	子育てしながら働ける環境がある	松本市	前橋市	佐賀市
	起業スピリッツがあり、スモールビジネス にも適している	東京	つくば市	福岡市

図表 7 今回作成した 12 のランキングのいずれかで 10 位以内となった 40 都市



注：数字は、10 位以内にランクインしたランキングの数（5 つ以上は黒字に白抜きにて表示）。